

## 中国古代の歌の禁忌

富 田 美智江

### はじめに

私は二〇一〇年から雲南省白族大理自治州で白族の歌調査を、二〇一三年から湖南省湘西土家族苗族自治州で苗族の歌調査を行っている<sup>1)</sup>。中国南方少数民族の中には、男女が交互に歌を歌い合いながら恋愛関係となっていく、いわゆる歌垣に類する習俗があるとされ、注目されてきた。今日では、実際に歌で知り合い歌で結婚したという例はかなり少なくなっているが、高齢者の中には歌で結婚したという人もいた。

歌を歌うのは恋愛のときだけではない。山で山羊を追いながら歌うこともあれば、家に客が来れば酒をすすめる歌を歌う。歌は、伝統的な古歌もあれば即興で作られたものもある。夜を徹して歌い続けたという話も珍しくない。学校教育が普及した近年では民族歌謡の歌えない若者が増えたとはいえ、歌は人びとの生活の一部といえる。とはいえ、いつでもどこでも歌ってよいというわけではない。歌によつては、歌うのに相応しい場、相応し

くない場というものがある場合もある。たとえば「梁山伯と祝英台」(中国を代表する悲恋物語で、中国大民間説話の一つ)は白族の語り芸(科白部分もあるが、多くが歌で構成されている)でも好んで用いられる題材だが、結婚式では歌ってはいけないという。なぜならこの話は、梁山伯と祝英台は愛しながらも一緒にすることができず、ついには二人とも死んでしまうという内容であり、結婚式で歌うには縁起が悪いからである。また苗族は、葬式では歌は歌わないという。

では古代中国では、歌はどのようなときにどのような場で歌われたのだろうか。始皇帝の暗殺を燕の太子に依頼された荊軻は、易水を渡るときに易水歌を歌い、垓下に包囲された項羽は垓下歌を歌い、劉邦は皇帝となり故郷の沛に戻ったとき、大風歌を歌ったという。易水歌は見送りにきた知人たちとの別れに際して歌われた悲壮な歌であり、垓下歌もまた四面楚歌の中、敗北を悟った項羽によって歌われた悲憤の歌である。逆に大風歌は、故郷に錦を飾り得意満面の劉邦によって歌われた。荊軻は易水のほとりで道祖神を祀って旅の安全を祈願したあと、友人の高漸離の筑(琴瑟に似た弦楽器)に合わせて、悲哀に満ちた声で歌った。項羽は酒を飲みつつ数回繰り返し返して歌い、虞美人が唱和した。劉邦は故郷の人びとを集めた酒宴の席で、みずから筑をうち歌っただけでなく、沛の子ども百二十人を集めて唱和させたという。このように歴史の一場面をいろいろの歌は少なくない。易水歌も垓下歌も大風歌もその場で即興的に作られた歌だが、春秋時代には宴席などで『詩』が歌われていたことが、『左伝』などに書かれている。『詩』とは、儒家の基本經典である五經の一つで、のちに『詩経』とよばれることになる中国最古の詩集である。そこに収められた三百余篇の詩は、おおそ春秋初期をその成立時期の下限としている。つまり一部の宴席では『詩』という古詩が歌われていたことになる<sup>②</sup>。

歌われる場はもちろん宴席だけではない。狂接輿は道を歌いながら歩いて孔子の前を過ぎ、呂后によって幽閉された戚夫人は春<sup>うす</sup>きながら歌った。名のある人ばかりでなく、名もなき人びとも歌う。前述の四面楚歌を演

出したのは、項羽を囲む漢軍の兵たちだった。周の宣王は「槩弧箕服、実に周国を亡ぼさん（槩弧箕服、實亡周國）」という童謡を聞き、槩弧（山桑の弓）と箕服（箕のえびら）を売る夫婦を殺そうとした。宣王の手から逃れた夫婦が拾い育てた娘こそ、のちに幽王に寵愛され、西周滅亡の一因となる褒姒である。このように市井の歌はときに予言として機能した。また、市井の歌から民の風俗や政治の得失を知ることができるという考えから、いにしえには詩を採集する采詩の官が置かれていたという言説が生まれ、実際に漢の武帝は樂府を立てて民間歌謡を採集した。『公羊伝』宣公十五年「什一行われて頌声作おる（什一行而頌聲作矣）」の注に、民の歌について次のようにいう。

男女に怨み恨む所有れば、相い従いて歌い、飢うる者は其の食を歌い、勞する者は其の事を歌う。（男女有所怨恨、相從而歌、飢者歌其食、勞者歌其事。）

民は不満があれば歌い、飢え疲ればそのことを歌う。恨み言だけでなく、称えるときもまた歌う。『左伝』襄公三十年には、鄭の子産の施政について民が歌った話載っている。

政に従うこと一年にして、輿人之を誦して曰く、我が衣冠を取りて之を楮たくわえしめ、我が田疇を取りて之を伍にす。孰か子産を殺さん、吾れ其れ之に与せん、と。三年に及びて、又た之を誦して曰く、我に子弟有り、子産之を誨おしう。我に田疇有り、子産之を殖す。子産にして死せば、誰か其れ之を嗣がん、と。（從政一年、輿人誦之曰、取我衣冠而楮之、取我田疇而伍之。孰殺子産、吾其與之。及三年、又誦之曰、我有子弟、子産誨之。我有田疇、子産殖之。子産而死、誰其嗣之。）

子産が政務を執るようになってから一年は、「子産が衣冠や田畑を取り上げた、子産を殺す者がいるなら味方する」と、怨嗟の歌が流行ったが、三年たつと今度は、「子産が子弟を教育してくれた、子産が田畑を増やしてくれた、子産が死にでもしたら誰がその後を嗣げるだろうか」と、子産の善政を称える歌を歌いあつたという。文献史料に残る民間の歌は歴史に関わるものが多いが、その他史料に残らない多くの歌が日常的に歌われていたことだろう。それは豊かな歌文化を今日まで伝える少数民族たちと変わらないはずである。田植え歌や、狩りの歌、放牧の歌、柴刈りの歌といった生活の歌から、祭りで歌われる神話伝説、そして男女が集えば恋の歌が、日常非日常それぞれの場面で歌われていた。そのような中国古代社会において、逆に歌ってはいけないとされる場はあつたのだろうか。本論では歌の禁忌という側面から、中国古代の歌文化を探っていききたい。

## 一 孔子と歌

中国では、「礼楽」というように音楽は儒家思想の中で礼制と並び重視されてきた。たとえば『論語』泰伯篇に「子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る（子曰、興於詩、立於禮、成於樂）」とあるように、孔子は人格形成に必要な要素の一つとして音楽を位置づけた。その他にも『論語』には孔子と音楽の関わりを示す話が散見する。述而篇では「子、斉に在りて韶を聞き、三月肉の味を知らず（子在齊聞韶、三月不知肉味）」と、斉で舜の時代の音楽である韶を聞いた孔子は、三ヶ月もの間肉の味が分からなくなるほど感動している。また子罕篇では「子曰く、吾れ衛より魯に反り、然る後に樂正しく、雅頌各おの其の所を得たり（子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所）」と、孔子が衛から魯に戻つてきてから音楽が正され、宮廷の歌である雅や宗廟祭祀の歌である頌の乱れも整理されたとする。陽貨篇には、武城という小さな町で国家祭祀で使うような弦

歌を練習する声を聞いた孔子が、「鶏を割くに焉んぞ牛刀を用いん」と笑ったところ、弟子の子游に反論され、「前言は之に戯れしのみ」と前言を取り消すといった一幕もあった。<sup>(3)</sup>

宮中の雅楽をはじめとして音楽は主に楽人によつて演奏された。当時の楽人は視覚不自由者が多数を占めていたようで、衛霊公篇には目の不自由な楽師を敬意をもつて介助する孔子の姿が描かれている。<sup>(4)</sup>だが楽器を扱えるのは楽人だけではなかった。『論語』陽貨篇には次のような一章がある。

孺悲、孔子に見えんと欲す。孔子、辞するに疾を以てす。命を將う者、戸を出づ。瑟を取りて歌い、之をして之を聞かしむ。(孺悲欲見孔子。孔子辭以疾。將命者出戸。取瑟而歌、使之聞之。)

孺悲という者が孔子を訪ねてきたが、孔子は病を理由に面会を断つた。しかし、取り次ぎの者が出ていくと、孔子は瑟を取つて歌い、戸外に聞かせた。瑟とは大琴である。なぜ孔子がそのようなことをしたのかというと、面会したくないがために仮病をつかつたのだということを、孺悲に知らしめるためだったとされている。<sup>(5)</sup>孔子の真意はさておきここで注目したいのは、孔子の家の室内には瑟が置かれており、孔子みずから瑟をつま弾き歌つたという点である。さらに『史記』孔子世家には次のような話も載っている。

孔子、陳・蔡の間に在るを聞き、楚、人をして孔子を聘せしむ。孔子、將に往きて礼を拝せんとす。陳・蔡の大夫謀りて曰く、孔子は賢者なり。……孔子、楚に用いらるれば、則ち陳・蔡の事を用うる大夫は危うからん、と。是に於いて乃ち相い与に徒役を発し、孔子を野に囲む。行くを得ず、糧を絶つ。従者病み、能く興つもの莫し。孔子、講誦弦歌して衰えず。(聞孔子在陳蔡之間、楚使人聘孔子。孔子將往拜禮。

陳蔡大夫謀曰、孔子賢者。……孔子用於楚、則陳蔡用事大夫危矣。於是乃相與發徒役圍孔子於野。不得行、絕糧。從者病、莫能興。孔子誦弦歌不衰。」

孔子が楚に招かれたと知った陳と蔡の大夫たちは、孔子が楚で登用されることがあつては一大事と、孔子を楚への途上で取り囲んだ。囲まれた孔子の一行は進むことができず、食糧が尽き、従者はみな病んで立ち上がることもできなくなつた。そのような危機的状況にあつても、孔子は書物を誦読し、また琴をつま弾いて歌うという日々の日課を怠らなかつたという。

このように孔子は身近に琴瑟を置き、それをつま弾き歌うことを常としていた。楽器を常に身近に置いておくというのは孔子に限つた話ではなかつたようである。『礼記』曲礼下は次のようにいう。

君は故無くば、玉、身より去らず。大夫は故無くば、県を徹せず。士は故無くば、琴瑟を徹せず。（君無故、玉不去身。大夫無故、不徹縣。士無故、不徹琴瑟。）

諸侯は理由無く佩玉を身から離さず、大夫は理由無く掛けつるして打ち鳴らす鐘や磬などの打楽器を外さず、士は理由無く琴瑟を片づけることをしない、というのである。士や大夫らにとって琴瑟は常に身近に置くべき楽器だつた。鐘や磬を打ち鳴らすのは楽人の務めだつたかもしれないが、琴瑟は孔子と同じくみづからつま弾く士大夫もいただろう。

さて、孔子は琴瑟をみづからつま弾くだけでなく、それに合わせて歌も歌つた。それはほとんど日課のようなものだつたのだろう。だが、その孔子も歌を控えるときがあつた。『論語』述而篇は次のようにいう。

子、喪ある者の側らに食すれば、未だ嘗て飽かざるなり。子、是の日に於いて哭すれば、則ち歌わず。  
(子食於有喪者之側、未嘗飽也。子於是日哭、則不歌。)

孔子は、喪中の者と食事をとるときは満腹になるまで食べることはせず、弔問に行き声をあげて泣く哭礼をした日には歌わなかったというのである。哭した日には歌わないというのは、葬式では歌は歌わないという今日の苗族にも通じる習慣だが、ではなぜ哭した日には歌わないのだろうか。

## 二 喪葬の禁忌と歌

哭した日には歌を控えるという言葉は、『礼記』曲礼上にも「哭する日は歌わず（哭日不歌）」と見える。もともと一般的な習俗だったのか、孔子に影響されて広まったものなのかは定かではないが、ともかく哭礼をした日には歌わないというのは少なくとも儒家の礼では一般化されたようである。

では、なぜ哭礼をした日には歌わないのか。前述の「哭する日は歌わず」の前後には、主に喪葬時にすべきこと、避けるべきことが次のように列挙されている。

墓に適<sup>ふ</sup>けば壟に登らず。葬を助くるに必ず紼を執る。喪に臨めば笑わず。人に揖するに必ず其の位を違<sup>さ</sup>る。柩を望めば歌わず。入<sup>り</sup>て臨せば翔らず。食に当たりては歎ぜず。鄰に喪有れば、春<sup>うすつ</sup>くに相せず。里に殯有れば、巷歌せず。墓に適けば歌わず。哭する日は歌わず。喪を送るに徑に由らず。葬を送るに塗潦を避<sup>さ</sup>けず。喪に臨めば則ち必ず哀色有り。紼を執れば笑わず。楽に臨めば歎ぜず。(適墓不登壟。助葬必執紼。

臨喪不笑。揖人必違其位。望柩不歌。入臨不翔。當食不歎。鄰有喪、春不相。里有殯、不巷歌。適墓不歌。哭日不歌。送喪不由徑、送葬不辟塗潦。臨喪則必有哀色。執紼不笑。臨樂不歎。」

墓地に行ったら土まんじゅうには登らない。埋葬の手助けに行ったときは必ず柩車を引く綱を手を持つ。人に会釈するときには必ず自分の席から立つて行く。室内で葬式に臨席するときにはひじを張って歩かない。葬列を送るときはわき道を通らず、泥道や水たまりを避けない。葬儀に参列するときには必ず悲しみを顔に出すといったことに加え、葬儀に臨席したとき、柩車の引き綱を持っているときは笑わない、そして柩車を見たときや墓地に行ったときには歌わない、といった注意が並ぶ。なぜ笑ってはいけないのか、歌ってはいけないのかということについて、鄭玄は「喪に臨めば笑わず」の注に「喪に臨めば宜しく哀色あるべし（臨喪宜有哀色）」、「哭する日は歌わず」の注に「哀しみ未だ忘れざるなり（哀未忘也）」と説明する。つまり喪葬時という哀しみに満ちた場で、笑うことは相応しくないというのである。逆に、食事のとき、音楽が演奏されているときには嘆息してはならないという。その理由について鄭玄は、「食に当たりては歎ぜず」に「食には或いは樂を以てす、歎所に非ず（食或以樂、非歎所）」と注する。なぜ食事時に嘆息してはならないかという、食事の際には音楽が演奏されることがあるから、というのである。つまり、食事時だからというよりも、音楽が演奏される場で嘆息することは望ましくない、ということになる。

また鄭玄は、前節にあげた『礼記』曲礼下の「（土は故無くば琴瑟を徹せず）」について次のように注する。

憂樂は相い干さおかざるなり。故とは、災・患・喪・病を謂う。（憂樂不相干也。故、謂災患喪病。）



「故無くば」の「故」とは、災害や病氣、喪葬のことを指す。なぜこれらのことが起きたときには楽器を撤去するのかというと、憂いと樂しみを互いに干渉させないためである。楽器を撤去するということは音楽を奏でないということである。つまり、音楽は人を樂しませるものだからこそ、災・患・喪・病といった憂うべき状況のときには相応しくないのである。

人を樂しませる性質を持つ音楽は、陰陽というと陽に属すともいえるかもしれない。『礼記』郊特性は次のようにいう。

饗・禘に樂有りて、食・嘗に樂無きは、陰陽の義なり。凡そ飲は、陽氣を養うなり。凡そ食は、陰氣を養うなり。……飲は陽氣を養うなり、故に樂有り。食は陰氣を養うなり、故に聲無し。凡そ聲は陽なり。（饗・禘有樂、而食嘗無樂、陰陽之義也。凡飲、養陽氣也。……飲、養陽氣也、故有樂。食、養陰氣也、故無聲。凡聲、陽也。）

およそ声音は陽に属す。飲み物を主とする饗礼と春の宗廟祭祀である禘祭に音楽を用いるのは、それらが陽氣を養うためのものだからであり、食べ物を主とする食礼と秋の宗廟祭祀である嘗祭に音楽を用いないのは、それらが陰氣を養うためのものだからである。また同じく郊特性に、「昏礼に樂を用いざるは、幽陰の義なり。樂は陽氣なり（昏禮不用樂、幽陰之義也。樂、陽氣也）」<sup>(8)</sup>ともいう。婚礼に音楽を用いないというのがどこまで本当だったのか、これについては別に検討すべき課題であるが、ともかく音楽は陽に属すると認識されていたことがここからうかがえる。そして歌もまた音楽の一部であり、陽に属す性質だからこそ、陰の儀礼である喪葬の場には相応しくないと考えられたのだろう。

孔子が哭礼をした日に歌わなかったのは、死者を悼む気持ちで満ちているところに楽しく歌う気分にはとうていなれないという、感情的な理由も含まれていたかもしれない。だがそれが「哭する日は歌わず」と普遍化されると、死者へどれだけの思いがあったかということよりも、哭礼という悲しい日には歌を歌うという楽しい行為はしないものだという道義的な問題へと転換されていく。本節の冒頭にあげた『礼記』曲礼上の喪葬時に不適切とされる行為の数々も、全て道義的な観点から相応しくないと考えられたものといえる。

ここで、喪葬時の禁忌の中で、歌にかかわるものを改めて見てみよう。

- ・ 柩車を見たときは歌わない。
- ・ 隣家が喪中のときは、うすをつきながら歌を歌わない。
- ・ 同じ里の中に殯している家があるときは、道で歌わない。
- ・ 墓地では歌わない。
- ・ 哭した日には歌わない。

隣家が喪中のときや里に殯している家があるときは歌わないということは、逆にいえばそうでないときは日常的に歌っていたと考えられる。特に糲すり作業は毎食ごとに各家庭で行われていた可能性



図一：四川省成都市新都区出土漢代画像磚（高文編『四川漢代画像磚』上海人民美術出版社、一九八七年）

がある。粃すり作業は重労働であり、秦律では女性に課せられる労役刑の一つでもあった。図一は四川省から出土した漢代画像磚で、踏みうすで粃すり作業をする二人が左側に見える。同様の踏みうすは近年でもまだ使われており、一九八五年にNHKスペシャルで放映された「食と文明の世界像 第五集 大いなるアジアの恵み〜米〜」（『人間は何を食べてきたか 第二巻』（NHKソフトウェア、二〇〇三年））で紹介されたタイ北部のアカ族の村では、図一と同じような踏みうすを二人の嫁が使い、一家十五人の一食分の米を二時間かけて粃すりしていた。彼らは一日二食で、大人は一日に米を約一キログラム消費することなので、彼女らが一度に粃する量はおよそ五〜六キログラム程度と思われる。彼女らはカメラの前ではただ黙々とうすを踏み続けるのみで、作業しながら歌うのかどうかは残念ながら映像からはわからなかったが、中国古代ではうすをつきながら歌が歌われていたことは間違いない。だからこそ、呂后に幽閉され粃すり作業を命じられた戚夫人がうすつきながら歌うという話もできたのだろう。<sup>①②</sup>

### 三 出土資料に見える歌の禁忌

前節までは、『論語』や『礼記』など先秦秦漢時代の儒家經典を中心に歌の禁忌を見てきた。おそらく儒家思想の論理で理由づけされた部分もあるだろうが、その多くは民間の習俗に基づくと考えていいだろう。「歌ってはならない」とされた場面の多くは喪葬に関するものだったが、少し時代を下るとまた新たな歌の禁忌が現れる。『抱朴子』内篇微旨は次のようにいう。

或るひと曰く、敢て問う、長生の道を修めんと欲すれば、何ぞ禁忌とする所あらん、と。抱朴子曰く、

……若し乃ち善を憎み殺を好み、口は是なるも心は非、……偽を以て真に雑ぜ、姦利を採取し、人を誘いて物を取り、井を越え竈を跨ぎ、晦に歌い朔に哭す。凡そ一事有らば、輒ち是れ一罪となり、事の軽重に随いて、司命其の算紀を奪い、算尽きれば則ち死す。(或曰、敢問欲修長生之道、何所禁忌。抱朴子曰……若乃憎善好殺、口是心非、……以偽雜真、採取姦利、誘人取物、越井跨竈、晦歌朔哭。凡有一事、輒是一罪、隨事輕重、司命奪其算紀、算盡則死。)

『抱朴子』は東晋の葛洪によつて四世紀初頭に著された神仙思想の書である。ある人に長生の方法を尋ねられた抱朴子は、人の命を司る神である司命は罪の輕重によつて人の寿命を減らしていくとした上で、どのような行いが罪となるかを列挙する。善を惡み殺生を好む、口ではきれいな事を言つても心の内はそうではないといったことから始まり、最後に晦日に歌うことと朔日に哭することとで締めくくられる。晦日は月の終わりで朔日は月の始まりである。なぜ月の終わりに歌つてはならないかという、月が新月となつて消える晦日を月の死ととらえ、喪葬時に歌つてはならないという考えをそこにも当てはめたのだろう。逆に朔日は月が新たに誕生するめでたい日であるから、不吉な哭礼はしてはならないということになる。「晦に歌い朔に哭す」を禁忌とする一文は、『顔子家訓』にも「道書に曰く」として引かれて<sup>⑩</sup>いる。

儒家はあくまで礼として、人として守るべき道として、道義的問題として「歌つてはならない」場面を規定したが、道教では禁忌を犯せば己の寿命が縮む罪惡として「晦日に歌つてはならない」としている。歌と哭が対称的な行為として位置づけられているところは同じだが、儒家が喪葬時に歌つてはならないというのは、悲しむ人びとへの配慮も含まれていると考えられるのに対して、晦日の禁忌はあくまで自分のためのものである。儒家經典と『抱朴子』の成立年代を考えれば、はじめに喪葬時の歌を禁忌とする儒家の考え方が定着し、そこ

から敷衍して晦日の禁忌が生まれたとしてもよいところだが、出土資料の出現により、晦日の禁忌が先秦のころから存在していたことが明らかになった。

一九七五年に湖北省雲夢県睡虎地秦墓から、戦国末年から統一秦にかけての竹簡一一五五枚、いわゆる睡虎地秦簡が出土した。この中の日々の吉凶などを判じた『日書』とよばれる占いの書に、歌の禁忌が含まれている。曹峰によれば、睡虎地秦簡の中で歌に関する記述があるのは次の四箇所である。<sup>11)</sup>睡虎地秦簡『日書』には甲種と乙種があるが、歌についての記述があったのはいずれも甲種だった。

・弦・望及び五辰には以て興樂すべからず。(弦・望及び五辰不可以興樂。)(『日書』甲種二七正)

・秀とは、是れ重光を謂う。……祠・飲食・歌樂に利ろし。(秀、是謂重光、……利祠・飲食・歌樂。)(『日書』甲種三二正)

・徹とは、是れ六甲相逆……祠祀・歌樂すべからず。(徹、是謂六甲相逆……不可祠祀・歌樂。)(『日書』甲種四四正)

・墨日は、垣を壊す・屋を徹す・寄者を出すに利ろし、歌う母かれ。朔日は、室に入るに利ろし、哭する母かれ。望は、困倉を為るに利ろし。(墨日、利壞垣・徹屋・出寄者、母歌。朔日、利入室、母哭。望、利爲困倉。)(『日書』甲種一五五簡背)

最後の甲種一五五簡背の「墨日」とは晦日のことである。この簡は、晦日に歌うこと、朔日に哭することを禁じるという、『抱朴子』と同じ内容となっている。この秦簡の発見により、晦日の禁忌は儒家が全盛となる漢代以降に生まれたものでなく、それ以前から存在していた習俗であることが証明されると同時に、儒家の主

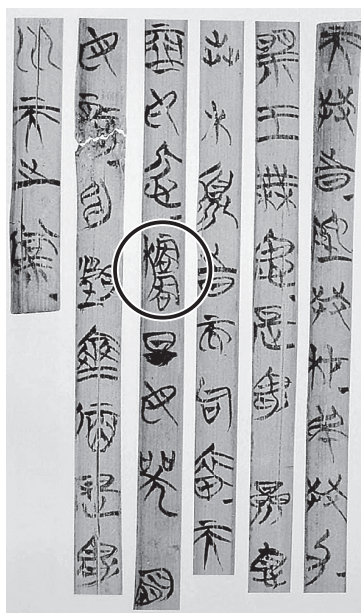
要な經典に入らなかった習俗がおよそ五百年の時を越えて道教の經典に受け継がれていたことも判明した。

#### 四 上博楚簡『三德』に見える歌の禁忌

歌の禁忌が書かれた出土資料は睡虎地秦簡だけではなかった。一九九四年に上海博物館が香港の骨董市場で購入した上博楚簡は、字体の類似から、湖北省から出土した郭店楚簡との関連が指摘され、また放射性炭素年代測定などからも戦国晚期（前三〇〇年前後）の楚のものと考えられているものだが、その中の『三德』と名づけられた篇に歌を禁止する文言が二箇所見える。『三德』は竹簡全三三枚（完簡五枚、整簡一〇枚、残簡八枚）、総字数八九八字の篇のため、該当箇所の前後のみ抜き出すこととする。解釈の分かれる語句もあるが、ひとまず原文は李零の釈文に、書き下しと現代語訳は湯浅邦弘の解釈を参考とした。まず第一簡から第三簡までについて見ていきたい。原文と書き下しの文中の【1】は竹簡番号であり、傍点は論者が付した。

##### ・原文

【1】天共時、地共材、民共力、明王無思、是謂三德。卉木須時而後奮、天惡如忤。平旦母哭、明母歌、弦望齊宿、是謂順天之常。【2】敬者得之、怠者失之、是謂天常。天神之□□□□、皇天將懼之。母爲僞詐、上帝將憎之。忌而不忘、天乃降災、已而不已、【3】天乃降異。其身不沒、至於孫子。陽而幽、是謂大惑、幽而陽、是謂不祥。齊齊節節、外内有辨、男女有節、是謂天禮。敬之敬之、天命孔明。



図二：『三徳』第一簡

・書き下し

【1】天は時を共（供）し、地は材を共（供）し、民は力を共（供）し、明王思う無し、是れを三徳と謂う。卉木時を須ちて後に奮うは、天忻（近）るが如きを惡めばなり。平旦に哭する母く、明（晦）に歌う母く、弦望に斉宿す、是れを天の常に順うと謂う。【2】敬しむ者は之を得、怠る者は之を失う、是れを天常と謂う。天神之□□□□、皇天將に之を憫めんとす。偽詐を為す母かれ、上帝將に之を憎まんとす。忌むべくして忌まざれば、天乃ち災いを降し、已むべくして已めざれば、【3】天乃ち異を降す。其の身没せずして、孫子に至る。陽なるべくして幽なるは、是れを大感（憂）と謂い、幽なるべくして陽なるは、是れを不祥と謂う。齊齊節節、外内に辨有り、男女に節有り、是れを天礼と謂う。之に敬しみ之に敬しめば、天命孔明たり。

・現代語訳

天は時を提供し、地は材を提供し、民は力を提供し、そのことによつて賢明な王はあれこれと思ひ悩むことがない、これを三徳という。草木がしかるべき時を待つてから成長・開花するのは、時の推移を無視して急迫するようなことを天が憎むからである。平旦に声をあげて泣くことをせず、晦には歌わず、半月と満月の日にはそれぞれ物忌みをする、こ



れを天の常に順うという。慎む者は得るが、怠る者は失う、これを天常という。天神之□□□□□、皇天は戒めるだろう。嘘をついてはならない、上帝はそれを憎むであろう。忌むべきものを忌まなければ、天は災いを降し、止めるべきものを止めなければ、天は怪異を降す。天寿を全うできず、子孫にまで（報いが）及ぶ。陽であるべき時に幽である、これを大憂といい、幽であるべきときに陽である、これを不祥という。身を慎み、内外に区別があり、男女に節度がある、これを天礼という。慎みの上にも慎めば、天命は大いに明らかとなる。

『抱朴子』や睡虎地秦簡『日書』では晦日に歌うことと朔日に哭することが禁忌とされたが、『三徳』では「平旦」に哭することと「明」に歌うことが禁忌とされている。この「平旦」と「明」の解釈については複数の意見が出ている。まず「平旦」から見てみると、釈文を担当した李零は明け方の寅の刻のこととしている。<sup>13</sup>王蘭は「平旦」を「再旦」と読み、日の出時に日食が起こり、二度夜明けがある天体異常を指すとして、前句の「天惡如斡」と合わせた二句を、天体異常が起きても慌てふためく必要はないという意味だと解釈する。<sup>14</sup>程少軒は「更旦」と読み、月が変わった日の朝、つまり初一日のこととする。<sup>15</sup>程少軒の説に従えば哭してはいけないのは初一日、つまり朔日となり、『抱朴子』らと同じになるが、そもそも「平」字が難読のため決めがたい（図二の丸で囲まれた字が「平」字）。

「明」字もまた解釈の分かれる字である。李零は「明」と隸定し、夜明けの意としたが、晏昌貴は「晦」字とし、『抱朴子』と同じく晦日の意だとする。<sup>17</sup>また范常喜は「暝」の異体字とし、暗い意だとする。<sup>18</sup>「晦」には暗いという意味もあるが、『抱朴子』の「晦」は「朔」と対になっており、みそかの意である。「平旦」を日の出・夜明けの意とするならば、対である「明（晦）」は日の入りの薄暗い時刻を指す語と考えられるし、「平旦」を朔日の意とするならば、「明（晦）」は「晦日」と考えるべきだろう。



もう一箇所は第十簡から第十二簡までの部分である。

・原文

【10】皇后曰立。母爲角言、母爲人倡、母作大事、母□常、母壅川、母斷洿、母滅宗、母虛牀、母□敵、母變事、母焚古□、母【11】恥父兄、母羞貧、母笑刑、母揣深、母度山、母逸其身而多其言。居母惰、作母康、善勿滅、不祥勿爲。入虛母樂、登【12】丘母歌、所以爲天禮。監川之都、凭岸之邑、百乘之家、十室之□、宮室汙池、各慎其度、毋失其道。絀欲殺人、不飲不食。秉之不固。

・書き下し

【10】皇后曰立。角言を爲す母かれ、人倡を爲す母かれ、大事を作す母かれ、母□常、川を壅ぐ母かれ、【11】父兄を恥づかしむる母かれ、貧を羞ずかしむる母かれ、刑を笑う母かれ、深を揣る母かれ、山を度る母かれ、其の身を逸して其の言を多くする母かれ。居るに惰る母かれ、作すに康（荒）なる母かれ、善は滅す母かれ、不祥は爲す母かれ。虚に入りて樂する母く、【12】丘に登りて歌う母きは、天礼を爲す所以。監（臨）川の都、凭岸の邑、百乗の家、十室の□、宮室汙池、各々其の度を慎み、其の道を失う母かれ。人を殺さんと欲するを絀け、不飲不食。秉之不固。

・現代語訳

皇后曰立。激しい言葉で言い争いをしてはならない、人前で声高に騒いではならない、軽率に大事を行って

はならない、母□常、川の流れをふさいではならない、水流の集まるところを断絶してはならない、家系を絶やしてはならない、床を虚しくしてはならない、母□散、規定の事業を変更してはならない、母焚古□、父兄を辱めてはならない、貧者を辱めてはならない、受刑者を笑ってはならない、川の深度を測ってはならない、山の高さを測ってはならない、自分自身を逸樂させおしやべりが過ぎてはならない、家にいて怠惰にしているはならない、仕事を粗雑にしてはならない、善をなくしてはならない、不祥のことは行ってはならない、虚に入つて音楽を奏せず、丘に登つて歌わないのは、天札に従う所以である。川に臨む大都、岸に近い邑、百乗の家、十室の□、宮室汙池は、それぞれその程度を慎み、その道を失ってはならない。人を殺そうという欲望を退け、不飲不食。秉之不固。

問題となるのは「虚」と「丘」の解釈である。晏昌貴は「墟」に読み、下文の「丘」と高さの異なる丘陵の意とし、曹峰は「丘墟」は土地の高低を指すのではなく、廢墟の意であるとする<sup>(20)</sup>。これに対し林文華は「墟」「丘」ともに墓地の意であるとする説を出した<sup>(21)</sup>。「丘」が丘陵の意とすると、山では歌えないことになり、国見歌のことなどを考えると違和感を覚える。その点林文華の説は、『礼記』曲礼上の「墓に適げば壟に登らず」「墓に適げば歌わず」とも合致するが、曹峰の廢墟説も、陰に属する廢墟で歌や音楽といった陽の行動をとるのは好ましくないからと考えれば矛盾しない。

ともかく、本論では解釈を無理に固定させることはせず、こうした出土資料により新たな中国古代の歌文化の側面が見えてくる可能性を指摘するにとどめたい。

## おわりに

伝世文献や出土資料から見える歌の禁忌の種類は、そう多くはない。一番は喪葬時の禁忌であり、これは歌の性が陽に属すと考えられていたことによる。今日の少数民族の中にも、苗族のように葬式では歌は歌わないとする文化も多い。しかし一方で、喪葬儀礼で歌を歌う事例も報告されている。<sup>②</sup>この問題を考えるにあたって、まずはじめに整理しなければいけないのが「歌」の定義だろう。本論ではあえて「歌」の定義を明確にしてこなかった。一定の旋律とリズムをもつて歌われていれば「歌」だとしていたところだが、これも文化によって差がある。決められた韻が踏まれていなければ歌と認められない場合もある。儒家は歌や音楽を「陽」と見なした。つまり「陰」の歌は歌と見なされなかった可能性もあるのではないだろうか。中国古代の「歌」の定義を考えることは、いわゆる挽歌と喪葬儀礼の関係を考える上でも必要と思われるが、これについては稿を改めて論じることにした。

もう一つ注目したいのが、大野裕司の「出土術数文献中には人に道德性を求める文章は一切見当たらない」という指摘である。<sup>③</sup>術数とはいわゆる占術のことである。術数文献である『日書』に歌の禁忌に関する記述があるということが、感情論や道德論とはまた別の理由による歌の禁忌が存在した可能性を示すものなのか、これもまた今後の検討課題としたい。

最後に、道を歌いながら歩く者について考えたい。『礼記』曲礼上は「里に殯有れば、巷歌せず」といい、これは裏を返せば、もがり（殯）をしている家がなければ日常的に里の道に歌声が響いていた可能性を示している。しかし、やはり街中で歌う者は尋常ではない。子どもたちは街角で歌うことが許容されていたが、彼らの歌う童謡さえも往々にして予言性を帯びた。歩きながら「鳳よ鳳よ」と孔子に歌いかけたのは、狂接輿と

いう「狂」者だった。<sup>(24)</sup>ただし、本当に狂っているのではなく、「佯狂」、つまり気が狂ったふりをしながら、したたかに自分の志をつらぬく、特異な存在だったと考えられる。<sup>(25)</sup>とはいえ、大の大人が街中で大声で歌うという行為は、「狂」者のすることである。朱買臣には、まだ貧しかった時分に道を歌いながら歩いていたところ、それを恥じた妻に離縁を求められてしまったという話がある。<sup>(26)</sup>この後朱買臣は漢の武帝の権臣にまで登りつめたことから、そうした「狂」的な行動は特殊な才能の持ち主であつたが故とわかるのだが、一般人の妻にはそれが分からず、彼女の目には夫はただの「狂」者としか写らなかつたのである。

注

(1) これらの調査については、遠藤耕太郎編『東アジアにおける「声の伝承」と漢字の出会いについての研究』（『共立女子大学総合文化研究所紀要』第十九号、二〇一三年）、拙稿『中国湖南省鳳凰苗族の歌掛け文化・資料編』（『アジア民族文化研究』第十四号、二〇一五年）、真下厚等『中国湖南省鳳凰苗族の恋人争いの歌掛け』（『アジア民族文化研究』第十五号、二〇一六年）、遠藤耕太郎等『中国少数民族歌謡における、音・意味・文字』（『共立女子大学総合文化研究所紀要』第二十三号、二〇一七年）などで報告している。

(2) 『詩』が歌われるのは、外交など他国人との宴の場であることが多く、同国人同士との宴では即興の歌も歌われている。なぜ他国人との宴では即興歌ではなく古詩である『詩』が好まれたのかというと、方言差のある他国人と即興歌で掛け合うと歌の意味が伝わらない恐れがあり、そのため誰もが知る『詩』が公用語のような役割をはたしたのではないかと考えられる。詳しくは拙稿『左伝』賦詩と春秋時代の『詩』（『史学』第七七卷第二・三号、二〇〇八年）参照。

(3) 『論語』陽貨篇「子之武城、聞弦歌之声。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也聞諸夫子。曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也。前言戲之耳。」

(4) 『論語』衛靈公篇「師冕見。及階、子曰、階也。及席、子曰、席也。皆坐、子告之曰、某在斯、某在斯。師冕出。子張問曰、與師言之道與。子曰、然。固相師之道也。」

(5) 何晏注「孺悲、魯人也。孔子不欲見、故辭之以疾。爲其將命者不已、故歌、令將命者悟、所以令孺悲思之。」

(6) 『莊子』讓王篇では、陳・蔡の間で窮し、七日も火を使った食事がとれなかった時も、孔子は琴をつま弾き歌うことをやめなかったとある。

『莊子』讓王篇「孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、顔色甚慙、而弦歌於室。顔回擇菜。子路子貢相與言曰、夫子再逐於魯、削迹於衛、伐樹於宋、窮於商周、圍於陳蔡。殺夫子者无罪、藉夫子者无禁。弦歌鼓琴、未嘗絶音、君子之无恥也若此乎。顔回无以應、入告孔子。孔子推琴、喟然而歎曰、由與賜、細人也。召而來、吾語之。」

また同様の話は、『莊子』秋水篇（孔子遊於匡、宋人圍之數匝、而絃歌不輟）、『呂氏春秋』慎人篇（孔子窮於陳蔡之間、七日不嘗食、藜羹不糝。宰予備矣、孔子弦歌於室、『淮南子』主術訓（然而圍於匡、顔色不變、絃歌不輟）などにも見える。

(7) 『礼記』正義は「大夫言縣、士言琴瑟、亦互言耳」と、大夫の「縣」と士の「琴瑟」は互文であるとする。

(8) たとえば『詩経』には周南桃夭のように、婚礼の祝願歌と考えられる詩がいくつかある。実際の婚礼に奏楽や歌がなかったとは考えにくい、これについては今後の課題としたい。なお、湖南省湘西土家族苗族自治州の土家族の中に、結婚儀礼で『詩経』の周南関雎や周南桃夭、小雅南山有台などを歌う習俗があることが報告されている（賈紹興『臧礼 湘西神秘婚喪礼俗考察記』学苑出版社、二〇〇九年）。

(9) 『漢書』外戚伝「高祖崩、惠帝立、呂后爲皇太后、乃令永巷囚戚夫人、髡鉗衣赭衣、令春。戚夫人春且歌曰、子爲王、母爲虜、終日春薄暮、常與死爲伍。相離三千里、當誰使告女。太后聞之大怒曰、乃欲倚女子邪。乃召趙王誅之。……太后遂斷戚夫人手足、去眼熏耳、飲瘖藥、使居鞠域中、名曰人彘。居數月、乃召惠帝視人彘。帝視而問知其戚夫人、乃大哭、因病、歲餘不能起。使人請太后曰、此非人所爲。臣爲太后子、終不能復治天下。以此日飲爲淫樂、不聽政、七年而崩。」なお『史記』呂后本紀には、戚夫人を永巷に囚えたところのみで、戚夫人がうすつきながら歌う場面はない。

(10) 『顔子家訓』風操「道書又曰、晦歌朔哭、皆當有罪、天奪其算。」「顔子家訓」は南朝の顔之推が六世紀に著した子弟への訓戒書。

(11) 曹峰『「三德」零釈（三）』簡帛網二〇〇六年四月一日 [http://www.bsm.org.cn/show\\_article.php?id=323](http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=323)

(12) 李零『三德篇釈文考釈』（上海博物館藏戰國楚竹書（五））上海古籍出版社（二〇〇五年）。図二も同書による。湯淺邦弘「『三德』の全体構造と文献の性格」（同編『上博楚簡研究』汲古書院、二〇〇七年）。

(13) 李零前掲注（12）論文。

(14) 王蘭「上博五『三德』編聯」（簡帛網二〇〇六年四月一五日）[http://www.bsm.org.cn/show\\_article.php?id=328](http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=328)

- (15) 程少軒「談談北大漢簡《周訓》的幾個問題」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究』第五輯、二〇一三年)
- (16) 李零前揭注(12) 論文。
- (17) 晏昌貴『三德』四札(簡帛網二〇〇六年三月七日) [http://www.bsm.org.cn/show\\_article.php?id=272](http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=272)
- (18) 范常喜「試說《上博五·三德》簡一中的「嘆」」(簡帛網二〇〇六年三月九日) [http://www.bsm.org.cn/show\\_article.php?id=278](http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=278)
- (19) 晏昌貴前揭注(17) 論文。
- (20) 曹峰前揭注(11) 論文。
- (21) 林文華『《上博五·三德》「入虛毋樂、登丘毋歌、所以爲天禮」考辨』(簡帛研究二〇〇八年二月二十八日) <http://www.jianbo.org/admin3/2007/linwenhua001.htm>
- (22) たとえば山田直巳の「雲南省大理白族の葬送歌唱 永香村踏葬歌」(『アジア民族文化研究』第十号、二〇一〇年)をはじめとする白族踏葬歌の一連の調査や、飯島獎「日本上代文学における歌垣の機能に関する一研究」(専修大学学位(博士)論文、二〇一一年)による陝西省紫陽県漢族の歌調査などが挙げられる。
- (23) 大野裕司『戦国秦漢出土術数文獻の基礎的研究』(北海道大学出版会、二〇一四年)。
- (24) 『論語』微子篇「楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮、鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而、已而、今之從政者殆而。孔子下、欲與之言。趨而辟之、不得與之言。」
- (25) 矢嶋美都子『佯狂 古代中国人の処世術』(汲古書院、二〇一三年)。
- (26) 『漢書』朱買臣列伝「朱買臣字翁子、吳人也。家貧、好讀書、不治產業、常艾薪樵、賣以給食。擔束薪、行且誦書。其妻亦負戴相隨、數止買臣毋歌嘯道中。買臣愈益疾歌、妻羞之、求去。買臣笑曰、我年五十當富貴、今已四十餘矣。女苦日久、待我富貴報女功。妻恚怒曰、如公等、終餓死溝中耳、何能富貴。買臣不能留、即聽去。其後、買臣獨行歌道中、負薪募間。故妻與夫家俱上冢、見買臣饑寒、呼飯飲之。……會稽聞太守且至、發民除道、縣吏並送迎、車百餘乘。入吳界、見其故妻、妻夫治道。買臣駐車、呼令後車載其夫妻、到太守舍、置園中、給食之。居一月、妻自經死、買臣乞其夫錢、令葬。」